

YO-U

瓊



2020. 3. Vol.20 No.1 Spring

勾玉集

采野久美子

ゆく秋のマーラーを聴く前夜祭
ご即位や新しき秋君笑う
厚手カップイノダ珈琲冬日和

太田沙良

雪虫を知った日のこと話そうよ
たつぷりのコドク大好き日向ぼこ
冬の日のこの明るさは水の音

大槻春美

四日はやロシア映画とピロシキと
軽々と花嫁抱いて冬日和
嫉妬して影薄くなる雪女

高貴美子

雨のち晴れのち時々狐
ぽつぽんぽんぽんぽんぽんぽん
初あかねンゴロンゴロのバッファロー

後藤晴美

猫の鳴く夜を見ていた冬の月
朝が来て家族三人小豆粥
遺された言葉は誠実春を待つ

佐藤千重子

父ちゃんが大根煮て待つもう帰ろ
忘れてることを忘れて蒸しまんじゅう
味噌蔵の奥のあそこの冬の穴

武智由紀子

頬杖と婦人公論冬薔薇
シルル紀の羊歯の化石と冬銀河
狸汁昭和の話きりもなく

勾玉集を読む



はしもと風里

ご即位や新しき秋きみ笑う

久美子

佳き日のことを早速詠みましたね。

○冬の日のこの明るさは水の音

沙良

五感を研ぎ澄ます。句の幅が広がる。

○四日はやロシア映画とピロシキと

春美

共感。

初あかねンゴロンゴロのパッファロー

貴美子

ンゴロンゴロー不思議の国に迷い込んだよう。

高貴美子

雨のち晴れのち時々狐
ぽつぽんぽんぽんぽんぽんぽん
初あかねンゴロンゴロのバッファロー

後藤晴美

猫の鳴く夜を見ていた冬の月
朝が来て家族三人小豆粥
遺された言葉は誠実春を待つ

佐藤千重子

父ちゃんが大根煮て待つもう帰ろ
忘れてることを忘れて蒸しまんじゅう
味噌蔵の奥のあそこの冬の穴

武智由紀子

頬杖と婦人公論冬薔薇
シルル紀の羊歯の化石と冬銀河
狸汁昭和の話きりもなく

○猫の鳴く夜を見ていた冬の月

晴美

夜を見ていたという過去形に惹かれてしまいます。

忘れてることを忘れて蒸しまんじゅう

千重子

忘れてることを忘れる。もしや幸せなことかも。

○シルル紀の羊歯の化石と冬銀河

由紀子

羊歯の化石とは何と魅力的な。

代々の白菜漬ける重石かな

好美

重石から旨いだしが出てきそうな感じですね。

○デパ地下は酸素不足や年の暮

信子

賑やか、混雑、ではなく酸素不足。面白い表現。

北山時雨ケチャップ派なりオムライス

保江

しっとりした季語に、みんなの好きなオムライス。

出合いがしら冬満月にぶつかった

多津子

大きな大きな明るい満月だったのね。

猪一頭捌いた話とお裾分け

夏子

二十五年前牡丹肉の味を知りました。美味でした。

○寒北斗ラジオドラマの井戸の音

和代

ドラマをラジオで。落ち着く夜の過ごし方ですね。

○除夜の鐘遠くに聞きて聖書読む

ひむれ

遠くに聞きて、がいい。聖書の言葉が心に響く。

○心にも重さがあるよ冬日向

了子

心の重さが計れるのは本人のみ。私もときに重い。

○福笑いほくろをおけば母になる

一代

福相にチャームポイントのほくろ。懐かしい母上。

半月の照らす物干四日かな

くみこ

物干し場に淑気名残り。

優しさに弱くなりけり花八手

美津子

そうですね。たしかに弱くなりました。

○歩け峯け銀杏落ち葉をひとりじめ

洋子

両手を振って落葉踏む音を聞きながら、爽快。

ごまめにも大きな夢があったはず

さくら

ふふなんだか身につまされるんですけど。

○訃の知らせ冬空とても青いの

いろは

美しい青空に切なさも深くなります。

冬木の芽

はしもと 風里

かぎ針は自在に冬の夜を遊ぶ

セーターの胸を飛び立つ鳥一羽

ひとことがひりひり沁みる落葉踏む

冬の雲テラスに羽が落ちてゐる

バイオリズムの狂ひはじめる室の花

クリスマス心電図室にぽつんと居る

老人のこゑ初雪に消されけり

こんなにも黒の似合はず雪女郎

いもうとは今夜も不在月冴ゆる

覚悟決め今日をふくらむ冬木の芽

放り込む

波戸辺 のぼら

冬支度合間合間の古い仕度
木枯一号マローン色の電車
毛糸編むイヴ・モンタン似のマダム
あれやこれスマホに放り込む師走
百万回も生きられないが年新た
買い初めの巨大厚揚げ見せ合いぬ
聴診に胎児の鼓動七日かな
冬の海無性にフアドが聴きたくて
風花や夫の知らない店に行く
シナモンの香りの中の寒稽古

けしゴム

お一た えつこ

けしゴムにバナナの匂い火恋し
えんぴつのほんのりぬくい秋夕焼
ちよんと来て黒い小鳥のよく遊ぶ
自由席に自由はなくて神の旅
ショパン展のポスター見てる息白し
古いピアノしずかに拭いて冬深む
水槽の底ひそひそと海鼠かな
水槽の余白にぼつり海鼠かな
宇宙ひとつ映して海鼠沈みけり
炬燵猫自由不自由自由自在

マーマレード

たかはし すなお

塩じゃけの特々大はパタゴニア
ぶかぶかのブーツかぽかぽ料亭へ
ナザレにてビッグウェーブ待つ二日
冬帽子正真正銘石頭
むつみ月小さな便座ちよこなんと
年新たビルの半分お買い上げ
無印の葱や大根いただきます
去年今年道の真ん中堂堂と
別館は閉まったままで年明ける
初夢はマーマレードのかおりして

散財

つじ あきこ

丸四角三角ボタン冬に入る
小春日の老舗の本屋が引越す日
二人来て一人待ってる小春空
それぞれに散財十二月の伊勢丹
無い物ばかり探して歩く冬暖か
幸せの大小なんて冬帽子
綺麗な手ですねって嘘冬の薔薇
窓際の憂鬱ポインセチア
寒椿鏡に今から十年後
ドン・ユーロ・ウオンと千円日脚伸ぶ

森の日

火箱 ひろ

倒木の静かな風化冬日差す

冬の木の枝先伸びあがるそぶり

揺れる枝揺れるココロに冬木の芽

野兎に心臓ひとつ私にも

冬の森しいんと三角耳になる

叡山の空気青女のくる匂い

森の日のそれからいろいろ雪ばんば

雪ばんば樹液ゆつくり巡る日々

冬櫟歩く夢みて五百年

裸木を抱いて心身しつかりす